

無麻酔下での歯石除去の問題点

医療法人社団敬和会 深川歯科

深川雅彦

犬の飼い主の間で動物の歯石除去に麻酔が必要か否かの議論があります。一部の動物病院では、身体へのリスクが少なく「動物の体に優しい」という理由から麻酔なしで治療を行っております。これに対して、獣医歯科学を専門とする医師らから、無麻酔での治療はむしろ動物に肉体的・精神的苦痛を強いることになるという指摘があります。無麻酔で治療を行う方が「動物の体に優しい」のか、麻酔下で行う方が適切なのか歯科医師としての立場から考えてみます。

麻酔なしで犬の歯石除去が可能なのか愛犬で試してみました。歯周ポケット内の歯面に硬く付着した歯石を除去するためには、スケーラーの鋭利な先端部を根面にあてがい力をかけ細かく動かすという動作が要求されます。金属性のスケーラーを歯に当てると犬は首を激しく振り嫌がります。頭を強制的に押さえると体を強張らせ逃れようともがきます。この状況では歯石除去はできません。結局、歯石除去は断念しました。

無麻酔での歯石除去の試みから、麻酔なしでは治療中に動物の急な体動を防ぐのは困難で、スケーラーにより動物の舌や口腔粘膜、顔面を傷つける危険性があることが分かりました。ヒトと異なり犬は口をあけたままの静止状態を維持できないので時間のかかる緻密な処置を行うことが不可能です。また、不快な状況から逃れようと犬が術者や介護者を咬む危険性もあります。

愛犬は金属製のスケーラーを見ただけで顔を背けました。除石時の痛みには渾身の力を振り絞って抵抗しました。この様子から犬が恐怖や苦痛を感じているように思えます。犬が精神的苦痛を覚える能力があるなら配慮が必要です。精神的苦痛とは恐怖や痛みを覚えても動きを封じられ逃げることができない状況から生まれる苦痛です。痛みは感覚で主観的体験です。苦痛は情動的な経験です。情動とは思考、学習・記憶などの高次精神機能の一つです。動物の心の中に入り込むのは困難ですが、動物が何を回避し何を欲しているかを実験で示すことは可能です。

痛みと鎮痛に動物がどのように反応をするのかを示すラットの実験があります。ラットを鉄板の上に置き温度を上げていくとラットは熱に反応し足を引っ込めます。次に、モルヒネ様の化学物質を与えると足を引っ込める動作が遅くなります。また、ラットに甘い水と鎮痛薬を混ぜた不快な味のする水を与えると、健康なラットは甘い水を選択して飲みます。関節炎にかかっているラットは不快な味がしても鎮痛剤を含む水を選択します。この結果から動物は痛みを覚え疼痛を回避しようと鎮痛を欲する行動を起こす能力がある事が分かります。

次に、動物の歯石除去に麻酔を使用しない理由を検討してみます。麻酔使用に反対する医師は合併症の発症を危惧しています。全身麻酔の合併症としては、血圧や呼吸器系の障

害、目のかすみ、頭痛、吐き気などがあります。麻酔反対の医師は、麻酔時に現れる不快な症状が動物の体を傷つけ、場合によっては死亡に至る例もあると主張します。また、合併症で飼い主とトラブルになることを憂惧しあえて麻酔を避ける医師もいるかもしれません。

全身麻酔の重篤な合併症の発生頻度は極めて稀なので、全身麻酔下で治療を行うメリットの方が明らかに大きいです。合併症のリスクより患者の利益が大きく上回るので全身麻酔導入は正当化されます。犬には苦しむ能力があるので不要な痛みや苦しみから保護しなければなりません。意識がある状態で体を押し付けて治療を行えば犬を苦しめることになるので「動物に優しい」ことにはなりません。麻酔下では無意識、無痛、不動状態となりますので痛みのみならず動物の動きから生まれる危険性を回避することができます。犬に危険や苦痛を与えずに適切な歯周治療が達成できるよう麻酔下で歯石除去が行われるべきと考えます。

2012. 9月